

文化資産のデジタルアーカイブが拓く、新たな創造への道

デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブ
推進協議会広報誌
2003 / No. 22
<http://www.jdaa.gr.jp>

春



CONTENTS

デジタルアーカイブと地域経営

「全国地域デジタルアーカイブ研究大会
2002 in ISHIKAWA」基調講演より

エジプト文明とデジタル・アーカイブ

「EVA-GIFU2002」基調講演より

JDA A

デジタルアーカイブと地域経営	2
全国地域デジタルアーカイブ研究大会2002 in ISHIKAWA	4
EVA-GIFU2002	6
エジプト文明とデジタル・アーカイブ	7
デジタルアーカイブフォーラム in NAGANO	10
鳥取デジタルアーカイブセミナー	11
「平成14年度 通常総会」の報告	13
デジタルアーカイブ地域普及啓発セミナー(北海道)	14
第1回 デジタルアーカイブ講演会(沖縄)	14
青森デジタルアーカイブ推進協議会 1周年記念セミナー	15
デジタルアーカイブの活用と産業観光の振興(愛知)	15
「コンテンツフロンティア in 京都2003」開催予告	16
「デジタル・ミュージアムの新潮流」開催予告	16
事務局より / メールマガジンのご案内	16

デジタルアーカイブと地域経営 ——地域ブランドの確立と文化経済

「魅力ある地域とは何なのか。そして、デジタルアーカイブと地域経営は両立し得るのか」。多くの地域が直面するこうした課題について、武邑光裕氏(東京大学大学院助教授)は、「文化的説得力こそが、地域経営を牽引する」と語ります。

ここでは、「全国地域デジタルアーカイブ研究大会 in ISHIKAWA」から武邑氏の基調講演(要約)をご紹介します。地域経営における知財、情報財の役割と、その可能性を展望します。

主 催 ■ 石川県、デジタルアーカイブ推進協議会
共 催 ■ 財団法人石川県産業創出支援機構
協 賛 ■ 中小企業総合事業団



武邑 光裕
東京大学大学院
新領域創成科学研究科 助教授

魅力ある地域づくりに向けて

ここ石川県は、私が初めてデジタルアーカイブに関わることになった地であり、その後の活動の原点でもあります。石川新情報書府についても、その構想段階から参加させていただいて、もう6年ほど審査監修を務めています。

この地域の特色としては、豊富な伝統文化のデジタル化を通じて、その担い手となる制作者の技術と、能力向上に注力してきた点です。

実際、ここ石川県は全国でも有数のIT産業の集積地として着実に発展を遂げており、この地で研鑽を積んだ数多くの企業が、時代のなかで日々進歩を続けています。

いうまでもなく、時代はハードパワーの時代から、ソフト創造産業の時代へと急速に転換しています。そして、従来の物をベースとした産業から離陸し、感性を基盤とした無重量産業へとその軸足を移しつつあります。

こうした動きは政策にも顕れています。国土交通省による『新ウェルカムプラン21』は、都市のサイン計画などを見直しながら、いかに日本という国を、魅力ある存在として世界にアピールするかというものです。海外からの旅行者数がここ20年ほど伸び悩んでいる現状、まさしくこれは国の緊急課題といえるでしょう。

魅力ある地域、都市、そして日本とはいったい何なのか。それを、国民一人ひとりが考えなければならない時代になりました。そしてこう

した視点こそが、今回のテーマ、地域ブランディングに通じるものなのです。

アセット・マネジメントという認識

地域ブランディングについてお話しする前に、まずその手段となるデジタルアーカイブに関して、今一度おさらいしたいと思います。

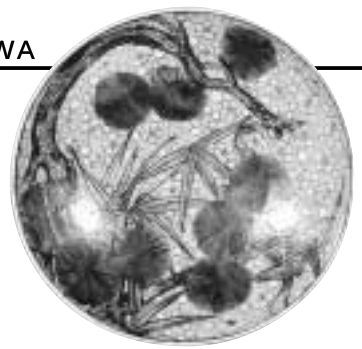
ご承知のようにデジタルとは符号化の技術であり、そこで創られたものは、文字、映像、音楽と何であれ、もとをたどせば0と1です。そしてこれは非常に流動的で離散しやすく、複製可能な情報です。デジタルとは絶対的に永遠であるといった誤解はいまだにあるようですが、実際はこれほどにはかなく、散逸しやすいものではありません。

米国のアーカイブ研究機関の報告によれば、紙の情報は数百年持ち、フィルムでは約100年、そして光学式磁気メディアにいたっては、20年も持てばいい方だとされています。

古来から受け継がれた伝統文化はもとより、今この瞬間に形成されつつある同時代的な資産を、いかにマネジメントしていくのか。今後の地域経営には、そうしたアセット・マネジメントに対する強い認識が求められます。

「文化的説得」が信頼を生む

世界は、従来の重量経済から、無重量経済へと大きくシフトしています。無重量経済、すなわちソフト経済の鍵を握るのは、『頭と心』で



す。新しい知財、情報財を、いかに高付加価値な商品へと変換していくかが今まさに、問われています。

ここで、文化というキーワードがたいへん重要な意味を持ってきました。広告の世界においても、従来アドバタイジングの手法は、なかなか通用なくなっています。何かを訴求し、浸透させていくうえで今後重要なのは、『文化的説得』です。

これは、手にした製品にどれだけ文化度があるのか、またその製品やサービスが、どれだけ文化の生産に寄与しているのかといったイメージ戦略です。

ご存知のように、ナイキ、ベネトンといった世界的ブランドは、その収益の大部分を、文化的事業への投資に充てています。そして私たちは、そこに文化という不可視な情報の存在を感じ、それを消費しています。ブランドとは、一言でいえばそういうことです。

一方で、アマゾン・コムやイーベイ、ヤフーといったサイバースペース上のブランドも、ここ数年で一気に、圧倒的な認知度を獲得しました。もっとも私たちは、その逆、つまり一気にブランドの信用が崩壊する現実をも、目の当たりにしてきました。

こうして見てみると、現実のブランド、Webブランドそのいずれもが、『信頼と約束』のうえに成り立っていることが解ります。

そしてこの原則は、地域のブランディングについても当てはまります。第一に、約束できないことをうたわないことです。誇大広告は、結果的に地域ブランディングを阻むことになります。この地域に来れば、これだけは約束できる、また提供できるといったものを考えていく必要があります。

加えて、積極的に外部の人間を登用していくことが重要です。地域にとってのユーザーとはいったい誰で、消費者は誰なのかを考えてみてください。自分たちのことだからこそ、そこに客観的な視点が欠かせないのです。

クリエイティブ振興がもたらすもの

ブレア政権下のイギリスは、数年前から『クール・ブリタニア』をキーワードとしたクリエイティブ産業の発展に注力してきました。

旧来の重厚長大産業にイギリス経済は救えないと考えたブレアは、

世界に提供し得る題材として、イギリスのデザイン、音楽、アートに目を付け、これを基幹産業として振興したわけです。

この政策は、個人の創造性や才能、スキルなど知的資産を基盤としたもので、いわばクリエイティブの根幹を振興しようというものです。

こうした取り込みは、2000年時点で早くも成果を表し、クリエイティブ産業の同国GDPに対する割合は、5%を超える水準にまで達しました。これは97年当時と比較して、16%もの成長率を示しています。

イギリスの例を見るまでもなく、今後の地域経営、地域ブランディングの鍵を握るのは、やはり人です。少なくとも、CDやDVDを流通させればよいという考え方は、もう卒業しなければなりません。

ちなみに、イギリスと日本のクリエイティブ産業における市場規模を比較すると、放送、広告といった業種については日本が上回っていますが、ことデザインやアートに関しては、イギリスを大きく下回ります。

これが示すものは、創造行為は基幹産業たり得ないとする日本の実状であり、また、文化とは経済行為の余剰部分でまかなわれるものという大半の認識の表れだともいえます。

共有資産という新たな視点

オランダ・バーク国際関係研究所のヴァン・ハム氏によれば、イギリスをはじめとするEU諸国のなかで、今やブランディングを国策として捉えていない国はないといえます。

たとえばエストニアは、唯一それしかなかった“緑”を糧に観光誘致を成功させています。またポーランドにいたっては、それまで古くさいとされていた敬虔なカトリック教徒のイメージを逆手にとり、修道院をホテルに改装するなどして、ヨーロッパ人の奥底に流れるメンタリティに訴求し、その心を掴みました。

ブランディングを興せない地域など、ありません。ましてや、京都や金沢の例を見て、そのような資産は自分たちにはないと考えるのは、あまりに一面的過ぎます。どんな地域にも、見落とされているものが必ずあります。

最近EUでは、地域全体のブランディングを見据えたキャラクター展開『キャプテン・ユーロ』が進められています。このキャラクターは、EU地域の共有資産として、さまざまなプロジェクトへの利用が促進されています。

共有資産というこの考え方に通じるものとして、最後に、アメリカにおける最新の動向をご紹介します。

『ブログ(BLOG)』と呼ばれるそれは、従来の電子メールとWebの中間領域を埋める新たな試みとして、現在爆発的に利用者を増やしている一種のアプリケーションです。地域住民の、あるいは地域間コミュニケーションのプラットフォームとして、この仕組みは必ずや、新たな潮流を生み出すでしょう。

地域アイデンティティの確立、ひいては今後の地域経営に対する重要なヒントとして、ぜひ覚えておいてほしいキーワードです。



2002年10月30日

全国地域デジタルアーカイブ研究大会2002 in ISHIKAWA

「デジタルアーカイブと地域経営—地域ブランドの確立と文化経済」

10月30日、金沢市の石川県立音楽堂・邦楽ホールにて、石川県および当推進協議会主催による「全国地域デジタルアーカイブ研究大会2002 in ISHIKAWA」が開催されました。

東京大学大学院助教授・武邑光裕氏による基調講演(前頁)では、EU諸国で進められるデジタルアーカイブを通じた地域ブランディングの現状が報告され、改めてその有効性が確認されました。また第2部の事例研究では、全国的な広がりを見せる地域アーカイブのなかから、一府四県による積極的な取り組みが紹介され、産業振興に向けた現状の課題と、今後の可能性について意見が交わされました。

主 催 ■ 石川県、デジタルアーカイブ推進協議会
共 催 ■ 財団法人石川県産業創出支援機構
協 賛 ■ 中小企業総合事業団



● 谷本 正憲 (石川県知事)

開会に先立ち谷本知事は、「石川県には、加賀・前田家の時代より息づく伝統芸能や工芸品が豊富にある。こうした資産をデジタル技術と融合させる試みとして、本県では、平成8年より『石川新情報書府』事業を実施している」と語り、今後も同書府を、県下の情報通信産業発展のための先導的プロジェクトとして位置づけていくの方針を示しました。

また、これまでに蓄積されたデジタル資産の利活用については、「地域産業の振興だけでなく、今後は教育、文化、そして国際交流といった幅広い視点に立ったうえで、その有効利用を考えていく必要がある」と述べました。



● 鈴木 良太郎 (デジタルアーカイブ推進協議会専務理事)

当推進協議会専務理事の鈴木氏は、「文化芸術振興基本法の成立やe-Japan構想の施行など、今やデジタルアーカイブは、欠かすことのできない重要な政策として位置づけられている」としたうえで、「当協議会においても引き続き、その普及啓発に尽力していきたい」と抱負を述べました。

次いで、今回初の試みとなった全国規模の同研究大会について触れ、「ネットワーク上の交流だけでなく、地域が一堂に会し、意見交換を通じて相互理解を深めることも重要」と語り、デジタルアーカイブ推進における地域間交流の促進を示唆しました。

プログラム

開 会
歓迎の詞 ~ 一調一管
主催者挨拶 谷本 正憲(石川県知事)
鈴木 良太郎(デジタルアーカイブ推進協議会専務理事)

第一部 ■ 基調講演
『デジタルアーカイブと地域経営—地域ブランドの確立と文化経済』
講 師 / 武邑 光裕(東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授)

第二部 ■ 地域デジタルアーカイブ事例研究
『地域におけるデジタルアーカイブ推進の現状と課題』
コーディネーター / 飯島 康裕(金沢大学経済学部助教授)

● 青森デジタルアーカイブ推進協議会
『産学官連携による新産業の創出への組織的な取り組み』
緑川 章一(青森大学助教授)
● NPO法人 地域資料デジタル化研究会 / NPO法人 文化資源活用協会

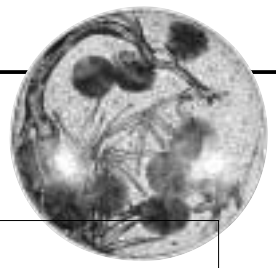
『市民活動によるデジタルアーカイブへの取り組み』
丸山 高弘(NPO法人 地域資料デジタル化研究会副理事長 /
NPO法人 文化資源活用協会理事)

● あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会(ADAA)
『愛知万博を契機とした世界への情報発信と国際交流の促進』
赤崎 まき子(ADAA代表副幹事 / 株式会社エイ・ワークス代表取締役)

● 京都デジタルアーカイブ研究センター
『デジタルアーカイブによるビジネスモデルの研究、提唱』
治田 嘉明(サブマネージャー)

● 石川新情報書府
『企画コンペを通じた地域資産のデジタル保存と情報産業の育成』
石塚 康志(石川県産業政策課長)

第三部 ■ 中央省庁政策報告
『今後のデジタルアーカイブ推進政策』
片岡 宏一(経済産業省 商務情報政策局 文化情報関連産業課長補佐)
北村 崇史(総務省 自治行政局地域情報政策室電子自治体推進係長)



第2部 ■ 地域デジタルアーカイブ事例研究 『地域におけるデジタルアーカイブ推進の現状と課題』より

青森

青森デジタルアーカイブ推進協議会の緑川章一氏(青森大学助教授)は、「白神山地や三内丸山遺跡、ねぶた、そして棟方志功まで、多様な地域資産に恵まれた青森の特色を活かしつつ、これらを地域産業に結びつけようという試みが積極的に進められている」と語り、また産学官連携の一例として、青森大学に導入されたデジタルコンテンツ制作技術者の育成講座について紹介しました。

青森では、先進技術導入の一環として中央との連携事業が盛んに行われているようですが、今後の展望として緑川氏は、「ミクスリアリティ技術を活用した三内丸山遺跡のデジタル復元などにより、同地域を『JOMON(縄文)』ブランド発祥の地として位置づけ、世界に向けて発信していきたい」と語りました。

青森デジタルアーカイブ推進協議会 <http://www.acci.or.jp/adaa/>

山梨

次いで、NPO団体として市民主導のデジタルアーカイブを推進する地域資料デジタル化研究会の丸山高弘氏は、「地域には、行政の手の及ばないところで失われていくものが多い。市民活動による地域アーカイブは、地域喪失に対する地元住民の危機意識の裏返しだといえる」と語り、地域アーカイブにおける市民活動の重要性を強調しました。

また丸山氏は、地域アーカイブ本来の目的は、地域アイデンティティの復興であり、確立であるとも述べ、「web上での展開と合わせて、ストーリーング技術を駆使した地元住民による地域のテレビ番組＝パブリックアクセスチャンネルにも取り組んでいきたい」と、地域活性化に向けた今後の抱負を語りました。

NPO法人 地域資料デジタル化研究会 <http://www.mt8.ne.jp/digi-ken/>

愛知

2005年3月の愛知万博開催を控えた同地域の推進団体、あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会(ADAA)の赤崎まき子氏は、「愛知県には、尾張徳川の文化などにみられる歴史資産も豊富だが、自動車をはじめとする製造品出荷高も25年連続して日本一。産業の集積地として発展してきたものづくりの歴史こそが、まさにこの地のアイデンティティなのだろう」と語りました。

こうした地域特性を活かし、現在愛知県では、産業観光をキーワードとしたさまざまな取り組みがなされているようですが、これについて赤崎氏は、「まだまだPRがへたくそなんです。たとえばこの地域には四日市の『たたき』をはじめとして、実にさまざまな自然共生型の産業技術が存在します」と語り、歴史に埋もれた地域の産業技術に光を当てることで、地球環境を踏まえた未来の産業のあり方を、世界に向けて発信していきたいと述べました。

あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会 <http://www.adaa.gr.jp/>

京都

デジタルアーカイブの黎明期より、地域経営という視点を明確に打ち出してきた京都デジタルアーカイブ研究センターの治田嘉明氏は、「これまでの経緯から、アーカイブされたデータの速やかな利活用を促すには、複雑な商取引における不安のないビジネスモデルの構築が必要不可欠と考えている」とし、また「そうした背景を確立することではじめて、アーカイブは自立した存在になるのではないか」と語りました。

京都デジタルアーカイブ研究センターの活動により、現在までに、二条城の障壁画を題材としたデジタルデータが様々な製品に活用され、また友禅の模様が水着のデザインとして利用されるなど、具体的なビジネス化がなされました。一方で治田氏は、「総じて未だコンテンツ不足の感はある」とも述べ、引き続き、周辺産業との連携を進めていきたいと語りました。

京都デジタルアーカイブ研究センター <http://www.kyoto-archives.gr.jp/>

石川

石川県では、ソフトウェア研修開発センター(第三セクター)の設置や、E-ビジネストライアルの実施など、さまざまな形で地域デジタルコンテンツ産業の人材育成に務めてきました。こうした取り組みについて、石塚康志氏(石川県産業政策課長)は、「人口10万人当たりの関連事業所数は全国で3位、同じくその従業員数でも全国4位。こうした現状が示す通り、情報通信産業の推進施策は、雇用の増大や技術の集積といったかたちで、徐々にその成果を見せはじめている」と分析しました。

また、デジタルコンテンツ産業振興の中核となるべく平成8年にスタートした石川新情報書庫について石塚氏は、「同事業は、技術の向上と産業振興を目的としたもの。そうした経緯もあり、同サイト上のコンテンツは、コンソーシアムによる企画コンペ形式で決定される」と説明し、加えて「世界各地のアーカイブとの連携を図っていくとともに、今後は、教育分野での利活用を見据えたコンテンツ制作が鍵となるだろう」と展望しました。

石川新情報書庫 <http://shofu.pref.ishikawa.jp/>

《 地域デジタルアーカイブ事務局会議 》の報告

2日目の31日、地域デジタルアーカイブ事務局会議が市内ホテルにて開催されました。北は青森から南は沖縄まで、全12団体の事務局が一堂に会し、笠羽晴夫氏(当推進協議会事務局長)を議長として、地域の活動状況に関する意見交換を行いました。

会議には、東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授の武邑光裕氏がアドバイザーとして出席し、各地域の活動について感想を述べると同時に、

今後の方向性について意見を交わしました。

なお、同事務局会議は、2003年度にも開催される予定です。

追記……

■前日の30日夜には、金沢市内でビジネス交流会が開催され、多数の方々が参加し、交流を深めました。



EVA-GIFU2002

視覚芸術に関する電子画像国際会議2002 —岐阜会議—

2002年11月12日から13日の2日間、岐阜県の大垣市情報工房・スィンクホールにて、「EVA-GIFU2002 / 視覚芸術に関する電子画像国際会議2002—岐阜会議」が開催されました。

今年で3回目を迎える本会議では、ヨーロッパを中心とした各国からの映像関連分野の研究者らが一堂に会し、「デジタル文化の可能性」と題したテーマのもと、活発な意見交換がなされました。各セッションでは、メディア、コンテンツ、そしてアーカイブなどに関する最新の動向が報告されると同時に、デジタル技術と人間との新たな関係づくりが模索されました。

主催 ■ EVA-GIFU2002実行委員会
共催 ■ 日本経済新聞社
後援 ■ 総務省、外務省、経済産業省

協賛 ■ 財団法人デジタルコンテンツ協会
デジタルアーカイブ推進協議会
デジタル・ミュージアム推進協議会

デジタル・アーカイブ・アライアンス
株式会社十六銀行
株式会社大垣共立銀行



梶原 拓 (岐阜県知事)

開会のあいさつとして梶原知事は、本格的な情報社会を迎えつつある現状を過去になぞらえ、「まさしくこれは、自動車と道路の歴史に当てはまる。マイカーにあたるパソコンが普及し、高速道路にあたるブロードバンドが整備されつつある今、問題は運転免許を持っているかということになる。そしてその取得者は、確実に増えている」と述べました。

加えて知事は、「今後は、ありとあらゆる車両を運ぶネットワークが鍵となる。そして、その連携をより具体化していくものがコンテンツではないか」と語り、コンテンツ時代の到来に向けた人材養成の手段として、引き続き、異質な人・文化の交流を推進していくとの方針を明らかにしました。

11月12日(火)

パネルディスカッション『メディア文化は世界の相互理解にどう貢献できるか』より

初日午後から開催されたパネルディスカッションでは、各国のパネリストにより、デジタル技術を通じた次世代メディアの可能性が検討されました。

香港からの参加となったNPO組織・アジアチャンネルCEOの羽仁末央氏は、「メディアのプロだからこそ見落としていた視点というものが、

一般市民にはある。97年の香港返還の際には、コミュニケーションの目的を持たない一個人によるアーカイブが数多く制作されたが、こうした市民独自の視点こそが、他国間における相互理解のツールになりえるのではないかと考えている」と語り、個人による表現形態のなかに、非営利メディア団体の新たな展開可能性を見出したいと述べました。

次いで東京藝術大学客員教授のチェスター・リーブス氏は、まず「メディアとは風景のなかにこそある」と前提したうえで、「ビルなどの建造物だけでなく、街全体の佇まい＝ゾーニングを保護し、記録していくことも重要だ」と述べ、有形無形を問わず、ランドスケープに内在するメディア機能の重要性を強調しました。

11月13日(水)

セッションII『デジタル化は地域活性化にどう役立てられるか』より

2日目の午前中に行われたセッションIIでは、地域ならではのアイデンティティと、それを受け継ごうとする新たなコミュニケーションのかたちかが報告されました。

東京藝術大学助教授の桂英史氏は、「アーカイブにはアクティビティが必須」としたうえで、学生らと共同で進めるワークショップ型のサウンドアーカイブ、サウンドコミュニティプロジェクトについて触れ、「街のなかの声やたわいもない音を、独自のデバイスで収集している。コミュニ

プログラム

● 11月12日(火)

オープニング [あいさつ]

梶原 拓 (岐阜県知事) / ビート・カッペリーニ (EVA代表)
坂根 巖夫 (EVA-GIFU2002実行委員会会長)

基調講演 [エジプト文明とデジタル・アーカイブ—その歴史と展望]

吉村 作治 (早稲田大学教授 同大エジプト学研究所所長 / 工学博士)

パネルディスカッション [メディア文化は世界の相互理解にどう貢献できるか]

吉岡 洋 / 羽仁 末央 / チェスター・リーブス / エリック・マイエ / ヤン・スンミ / リザベス・グッドマン

セッションI [アーカイブに何が可能か]

アレサンドロ・メコッチ / リザベス・グッドマン / クリストフ・ブレグラー / アンドレア・デ・ボロ / 神内 俊郎 / 松田 陽

● 11月13日(水)

セッションII [デジタル化は地域活性化にどう役立てられるか]

ビート・カッペリーニ / 桂 英史 /
アレサンドロ・メコッチ / 飯島 康裕 /
馬場 章 / 宮川 泰夫

セッションIII [創造的なコンテンツをめざして]

坂根 巖夫 / 國重 静司 / ラルフ・アメル /
入江 経一 / パオロ・ローザ / 中澤 篤志

セッションIV [ネットワークの未来像]

小野田 勝洋 / ヨン・ムー・クワン /
加藤 治彦 / ビート・カッペリーニ /
リュウ シュエ イェヌ / 千田 利史



ティのアーカイブには、今後こうしたボトムアップ型の取り組みが必要になるだろう」と強調しました。

金沢大学経済学部助教授の飯島康裕氏は、石川県における産業政策としてのデジタルアーカイブについて、「石川新情報書府などの政策事業を通じて、情報コンテンツ産業が地域に根付きつつある」と述べる一方で、「ただこれはあくまでも石川県における事例。NPOによる活動をはじめ、あくまでも各地域の特性に応じたデジタルアーカイブがあるはず」と語りました。

「地域の革新と文化の深化」と題した発表のなかで宮川泰夫氏(九州大学大学院比較社会文化研究院教授)は、「地域産業のデジタル化において大切なのは、身の丈にあった仕組みを創り出すこと」と述べ、住民主体の活動を支えるインターフェイスの重要性を示唆しました。また宮川氏は、「政治経済的な視点だけでなく、それがどれだけ地域の生活文化に寄与しているかが重要」とし、速度や範囲といった物理的評価にも増して、地域にとってのステイタスとは何かを考えていく必要があると語りました。

「EVA-GIFU2002」吉村 作治氏 / 基調講演より



「エジプト文明と デジタル・アーカイブ—— その歴史と展望」

古代エジプトより現在に受け継がれる幾多のアーカイブには、当時の人々の想いが、その暮らしの様子が、どのように描かれているのでしょうか。とかく発掘のイメージで捉えられがちな考古学ですが、その目的は発見ではなく、あくまでも人類そのものの理解にあると吉村氏はいいます。

ここでは、「EVA-GIFU2002」初日の催しから、吉村作治氏(早稲田大学教授 同大エジプト学研究所長・工学博士)による基調講演の模様をご紹介します。

エジプト発掘調査と映像考古学

「そもそもの考古学は、文字通り古(いにしえ)の人々の暮らしを考える学問です。言い換えれば、人類そのものに関する研究なんですね。でも最近の風潮を見ていると、どうしても『どこで何が見つかった』というような結果ばかりに目が向けられがちです。私はピラミッドとエジプト文明の調査研究を通じて、人類に対しさまざまな問題提起をしていきたいと考えているんです」

エジプト考古学の第一人者として知られる吉村作治氏は、1966年以來実に36年間に渡り、エジプトにおける発掘調査を続けてきました。そして、これまでの貴重な活動の記録は、すべて映像というかたちで保存しているといいます。

「考古学の現場を映像化することで、より多くの人々に私たちの活動を知っていただくと考えたわけです。私はこれを『映像考古学』または『映像エジプト学』と呼んでいます。これはエジプト留学中に、アルバイトでテレビ取材の手伝いをしたのがきっかけでした。そして、そこで得た技術や経験を利用しない手はないと考え、独自に発掘の記録を撮るようになりました」

その後、自身で撮影機材を購入するなどして、近年ではドキュメンタリー番組の制作に携わるようになった吉村氏ですが、映像アーカイブを始めた当初は、それこそ8mm片手に発掘調査を行っていたといいます。

そしてこの夏、吉村氏はサッカラの西方でピラミッドの原型(プロトタイプ)を発見しました。その後、電磁波地中レーダーや磁気探査など、物理探査の手法を使い分ける科学技術的調査を続けた結果、そこに地下室の存在を確認したといいます。

「発掘の一連のプロセスは、すべてデジタル映像で撮影してあります。何も無いところから始まって、部屋を見つけ、そしてその中へと足を踏み入れていく課程が、すべて映像記録として残されている。これは世界でも唯一の映像ですから、まさに究極のデジタルアーカイブといえるのではないのでしょうか」

発見した遺跡の記録だけでなく、そこに至る過程をもつぶさにアーカイブしているという姿勢は、考古学を単なる発掘の学問ではなく、あくまでも人類のための調査研究活動として位置づけようとするものだといえます。

また吉村氏は、こうした映像アーカイブを進める傍ら、昨年よりユネスコと共同で、ツタンカーメン王墓で知られる王家の谷、アメンヘテプ3世王墓の保存修復活動にも乗り出しました。

「映像アーカイブは、いわばバーチャルアーカイブです。これはこれで重要なことなんです。一方で王家の谷のような観光名所は、人の往来により遺跡の消耗が激しいのも事実です。記憶メディアへの保存と併せて、やはり実際の現場を保存し、場合によっては修復していくことも必要になってきています」

紀元前3,000年のアーカイブ

古代エジプトには、大まかにいってヒエログリフ、ヒエラティック、デモティックという3種類の文字が存在し、紀元前3,000年頃には、これらを用いたさまざまな記述がなされました。

『ナルメル王のパレット』と呼ばれる石碑には、当時の王が、いかにしてエジプトを統一したかという経緯が綴られています。アーカイブとは何もデジタルに限ったものではなく、デジタル技術以前の古来から続く、人類の本来的な営みだといえます」

古来エジプト文明におけるアーカイブ(文字による記録)の多くは、石碑やパピルス文書などに記された『権力者たちの言葉』だといえます。

「記録は、大きく2つの図式に分かれます。ひとつは、権力者から神に捧げられた言葉。そしてもうひとつが、権力者による民への通達です。現在のように、民から権力者(または神)へという図式もありそうなものですが、当時は、まだその伝達経路は存在しませんでした」

こうした文字による記録は、その後、神や王の業績を後世に伝える手段として幅広く用いられるようになりました。

1991年には、吉村氏率いる早稲田大学エジプト学研究所の発掘隊により、当時各国の調査隊が必死になって探していたという「カエムワセトの葬祭殿(魂の家)」が発見され、話題となりました。

「人類最古の考古学者として知られるカエムワセトは、第19王朝ラメセス2世の第4王子としてこの世に生を受けました。記録によれば、彼は3,300年ほど前の当時すでに、ピラミッドの修復を行っていたといえます。驚かされますね」

このほか、『エジプトはナイルの賜物なり』の言葉で知られるギリシャの歴史家ヘロドトスや、地理的観点から古代エジプトを記録した地理学者のストラボンなど、数多くの偉人たちにより古代エジプトの姿が記録されました。

こうした記録の多くは、現在エジプトのアレキサンドリア図書館に収められています。

「ローマ軍がエジプトに攻め込んできた際にアレキサンドリア図書館は火を放たれ、壊滅的な状態になったとされています。では、灰になったはずの資料が、なぜ現存しているのか。実は、かつてこの地に集った学者たちにより書き写された記録(写本)が、時代を経て、現在にまで受け継がれているんです」

ムセイオン — 知を集積するシステム

紀元前2,000年前後のエジプトにおいて、美術館や博物館に代表される知的空間は『ムセイオン』と呼ばれ、さながら知の殿堂ともいべき様相を呈していたといえます。

地中海沿岸諸国から集まってきた当時の学者や哲学者たちは、ここアレキサンドリアでさまざまな知識を吸収し、文書を写し取り、他の学者たちと意見交換をしながら学問を深めていたそうです。

「今でもそうですが、当時の知識階級も総じて食うや食わずの生活をしている人が多かったようです。しかし、そんな彼らもひとたびアレキサンドリアに来れば、衣食住が保障され、端から『先生、先生』とてはやされる。研究に没頭したいと考えている学者たちにとって、



ナルメル王のパレット。両面のレリーフには、王による国家統一が描かれている。91年、吉村氏率いる早稲田大の調査隊により発見された、カエムワセトの葬祭殿。02年夏、サッカラの西方で発見されたピラミッドの原型(プロトタイプ)。

これ以上の条件はなかったのでしょうか。もしそういう場所があるのなら、私も今すぐに引っ越したいですね(笑)」

ムセイオンで手厚い待遇を受けていた学者や哲学者たちは、その見返りとして、それぞれの知識や考えを、王や貴族、また民衆たちに向けて定期的に披露し、講釈したといえます。そして、発表された知識や考えがひとたび認められると、その論文はアレキサンドリア図書館に保存されました。

「実際、ユークリッドやアルキメデスといった著名な学者のほとんどがこのアレキサンドリアに招かれ、その考えを発表しています。あらゆる知がここに集結し、そして蓄積されていく——このシステムを考え出したのが、プトレマイオス1世です。彼は、その後300余年に渡るプトレマイオス王朝支配の先駆けとなった人物で、非常に機転の利く戦略家でした。そして一方では、文武両道の理念のもとに、ムセイオンをはじめとする文化的活動に注力した支配者でもありました。彼がいなければ、おそらく古代エジプトの、ひいては地中海周辺各国



©早稲田大学エジプト学研究所広報部

(魂の家)

の知的財産が、現代に継承されることはなかったでしょう。その頃の日本はいえ、まだ文字さえなかった時代です。しかしその当時すでに、彼は知的財産のアーカイブという視点を持ち合わせていたんです」

古代エジプトの記録は、その後さまざまな危機に瀕しながらも、時の権力者たちによって、近世に引き継がれてきました。そして1822年、ナポレオンの軍事遠征に同行していた学者たちにより、それまでのエジプト史をまとめた『エジプト誌』が作られました。

「一般に“戦争好き”とされがちなナポレオンですが、実際はかなり学術肌だったといえます。遠征には、学者や芸術家、技術者などからなる150人ほどの学術調査団を同行し、行く先々の文化や歴史などを調べていたそうですが、その集大成としてまとめられたのが、この『エジプト誌』です。この記録書は、古代エジプトの総合的アーカイブとしては最初で最後のものだといえます。この先、エジプトと日本、そしてデジタルアーカイブによって、その後の記録を引き継ぎたい

というのが、私の願いなんです」

その後ナポレオンは、ネルソン率いるイギリス軍との交戦中に、古代エジプト史上最大の価値ともいわれる『ロゼッタストーン』を発見しますが、結局この石碑は、戦いを制したイギリス本国に戦利品として持ち帰られ、現在、大英博物館に所蔵されています。

学生アーカイブに発表の場を

吉村氏が所長を務める早稲田大学エジプト学研究所では、発掘の記録を、毎年ビデオレポートというかたちで発表してきました。またこれら映像アーカイブは、『古代エジプト文明と遺跡(全17巻)』というビデオシリーズとして、現在までに2,000セットが販売されているそうです。

「我々のような私学の一研究所にとって、いかに研究を継続し、またどのようにしてアーカイブを蓄積していくかは切実な問題です。ビデオ販売という手段により、我々は多くの方々からの援助を募ると同時に、映像を通して多くの方々に、エジプトに関する教養を深めていただければと考えています。今後は先の映像のDVD化を皮切りに、MPEG4などブロードバンド時代に見合った最新の圧縮技術を、積極的に導入していくつもりです」

また、1998年に早大の独立大学院として設立されたGIT(国際情報通信研究センター)では、より実践的なエジプト研究の一環として、来春から現地調査を授業に取り入れつつ、学生自身の手によるデジタルアーカイブを実施していくそうです。

「授業に取り入れるにしても、問題は、学生たちの意欲をどう引き出すかということなんですね。人類のための、未来のためのアーカイブといっても、ただあるモノを蓄積していくだけでは、若い学生たちにとって魅力に欠けるし、おそろくついてもこないでしょう。『アーカイブのためのアーカイブ』では、骨董品集めと大差がなくなってしまいます」

GITIでは、学生アーカイブの作品的評価を目的として、CSチャンネル上に、彼らの研究発表の場を設ける予定だといひます。

「実体験としてエジプトに足を運び、目で見たものを調査し、記録していく。そして、それを学生たち自身の手で編集しかたにする。彼らには、自分たちのアーカイブに一貫して関わることで、何かしら社会との接点を見出して欲しいと思います。そうでなければ、大学は社会から隔離された存在になってしまう。あくまでも社会の一員として、一般の人々に認めてもらえるような方向を模索していく必要があるのではないのでしょうか」

加えて吉村氏は、エジプト学研究とアーカイブの今後について、理系・文系といった旧態依然の区分けを越えた、より学際的な協力が必要不可欠だと強調します。

「考古学というのは、文学ではないんですね。今問われているのは、ジャンルを越えた技術連携を進めながら、そこで得られた知見を、いかに世界に向けて発信していくかということです。こうしている間にも、技術は急速な進歩を遂げています。ではそれを使って、何を発信したいのか。世界の人々に何を伝えたいのか。皆さんそれぞれに、その何かが、きっと見つかるはずですよ。私の場合は、それがたまたまエジプトだったということなんですね」

2002年11月13日

デジタルアーカイブフォーラム in NAGANO

～ デジタル技術により創造する地域の文化と創造 ～



11月13日、長野駅近くのメルパルクNAGANOホールにて、「デジタルアーカイブフォーラム in NAGANO」が開催されました。長野県では、上田市がデジタルアーカイブの先駆的な取り組みを進めていますが、県内全域でのより一層の普及を目的に企画されたのがこのフォーラム。上田市の事業の歩みに加え、医療分野での展開事例が報告されるなど、デジタルアーカイブによる新たな産業創出の方向性が検討されました。

主 催：デジタルアーカイブフォーラム in NAGANO実行委員会

【構成団体】長野県、長野県情報サービス振興協会（NISA）

信州地域デジタルアーカイブ研究会、

上田市マルチメディア情報センター、

信濃毎日新聞社

協 賛：デジタルアーカイブ推進協議会

第1部・事例報告

● 地域特性あつてのデジタルアーカイブ

当推進協議会の笠羽晴夫氏は、デジタルアーカイブの目的や全国での取り組みを紹介したうえで、「デジタルアーカイブがあつて特色ある産業が生まれてくるわけではない。順序は逆」と強調しました。地場産業など地域の特性（強み）を再評価し、それ

を発展させたい、外にアピールしたいという際に使うのがデジタルアーカイブなり映像です。ここで地域特性と映像を結びつけ、活性化するのが「広い意味でのデザインのチカラ」とであると笠羽氏は語りました。

● 市民参加とコンテンツビジネス

上田市マルチメディア情報センターの井戸芳之氏は、同市が1995年から進めている『地域映像デジタルアーカイブ活動』の歩みを紹介。市民参加（映像発掘探検隊：市民が所有する映像資料の発掘・再生・活用）、コンテンツビジネスの創出（CD-ROM『真田三代 - 真田氏史料集』等の販売）など、活動が多方面に広がっていることを実例で示すとともに「今後も挑戦していきたい」と意欲を述べました。

● 医療情報のデジタルアーカイブ

長野県情報技術試験場の野瀬裕昭氏は、集団結核検診の遠隔診断に必要な、放射線画像のデータベース蓄積およびネットワーク配信について解説しました。

近年増加傾向にある結核ですが、現在は検診車で撮影した放射線画像を県の健康づくり事業団で現像し、このフィルムを医師に郵送して診断を行っています。ここで結核が疑われた場合は、比較のため、その人の過去の画像が再び同事業団から取り寄せられます。

このように、郵送および、過去のフィルムの手作業による検索という工程が入るため、受診から診断結果の本人通知までに要する期間は最長で60日。結核が感染症であることを考えると、決して望ましい体制とはいえません。

現在、野瀬氏らが技術開発を進めているシステムでは、放射

プログラム

第1部 ■ 事例報告

『全国のデジタルアーカイブの取り組み』

笠羽 晴夫（デジタルアーカイブ推進協議会事務局長）

『長野県におけるデジタルアーカイブの取り組み“上田市の事例報告”』

井戸 芳之（上田市マルチメディア情報センター事業係長）

『新たな産業的なデジタルアーカイブの取り組みの方向性

“医療におけるデジタルアーカイブ”』

野瀬 裕昭（長野県情報技術試験場生産システム部研究員）

第2部 ■ 講演

『もっとアーカイブ？ 壊すから残すへ』

加瀬 清志（放送作家）

第3部 ■ アーカイブ作品上映

産業アーカイブ作品『現代に生きる蚕種製造技術』

平成13年上田市マルチメディア情報センター制作

線画像をデジタル化してデータベースに蓄積、ネットワークで各地の医師に配信します。過去画像の検索も容易となり、野瀬氏は「目標としては、本人通知までの期間を6日間に短縮したい」と語りました。

第2部・講演

●蓄積データをリンクさせ、物語性を生み出す

加瀬清志氏は、放送作家、出版プロデューサーとしての自らの仕事に関連づけつつ、美術館によるデジタルアーカイブも「記録の保存所のなかに押し込んでおいて、たまに取り出すということではうまく立ち居かないだろう」と語りました。

加瀬氏は、フォーラム当日の11月13日が「漆の日」であると同時に、タレント・木村拓哉の誕生日、作詞家・サトウハチローの命日でもあることを指摘。またサトウハチローの代表作「ちいさい秋みつけた」のなかで「風見の鳥の ぼやけたとさかに はぜの葉ひとつ」と歌われるこの「はぜ」は、漆科の植物であるといいます。

「漆の日とサトウハチローと木村拓哉はリンクする。こうした発想が大切なんです。たとえば11月13日のテレビ番組で、木村拓



第3部では、上田市マルチメディア情報センターが制作した高精細デジタル映像『現代に生きる蚕種製造技術』が上映されました。この作品は、江戸時代から上田地域の発展を支えてきた蚕種業(カイコの卵の生産販売)に関する歴史史料を収録したもので、教育コンテンツとして幅広く活用されています。



哉に『小さな秋』を歌わせる。3つのデータをドラマ化することで、新しいコンテンツが生まれるわけです」

蓄積されたデータを組み合わせ、物語性をつくりだす。デジタルアーカイブにおいても、事業化を企図するならばこうした発想が必要となる。加瀬氏はそうに提言しました。



加瀬 清志(放送作家)

2002年11月16日

鳥取デジタルアーカイブセミナー

～ デジタルアーカイブによる地域再発見と産業創出 ～



11月16日、鳥取県米子市の米子コンベンションセンター・情報プラザにて、鳥取デジタルアーカイブセミナーが開催されました。

鳥取県では、2003年夏の竣工予定で「鳥取情報ハイウェイ」構想が進められていますが、これと平行して、デジタル情報財の整備が活発化しています。イベント当日も150人近い参加者を前に、デジタルアーカイブを通じた地域独自の情報発信に向け、産学官それぞれの期待に満ちた展望が示されました。

主催 ■ 中四国デジタルアーカイブ推進協議会、デジタルアーカイブ推進協議会、鳥取県デジタルアーカイブ研究会、鳥取県、米子市(社)鳥取県情報産業協会

後援 ■ 中国経済産業局、中国総合通信局、中国四県(島根、岡山、広島、山口)、四国四県(徳島、香川、愛媛、高知)、鳥取県市長会、鳥取県町村会、(財)鳥取県産業振興機構、鳥取大学、鳥取環境大学、地域活性化のための情報懇談会、NHK鳥取放送局、日本海テレビ、(株)山陰放送、(株)新日本海新聞社、中海テレビ放送(株)、日本海ケーブルネットワーク(株)



平井 伸治

(鳥取県副知事)

あいさつに立った平井副知事は、「かつて世界の工場として、その優秀な技術力を世界に知らしめた日本は、現在大きな転換期にある。私たち地域も、地域分権に基づきあらゆる叡智を結集していかなければならない」と語り、技術導入による情報発信の必要性を示唆しました。

また、現在県立博物館で進められている試みについても触れ、「24,000点の古文書、3,200点の美術品がすでにデジタル化され、一般へのWeb公開に向けた準備が進められている。今後は、手にした可能性をいかに具現化していけるかが重要だ」と語りました。



「アーカイブとコンテンツ流通」より
目次 俊夫
 (株式会社山陰ビデオシステム常務取締役)

山陰ビデオシステムでは、23年間に渡り地元映像中心の撮影を続けてきました。現在、同社の役員を務める目次氏は、ここ数年特に、コハクチョウの映像の集積に力を注いできた

といいます。

「“鳥”取だからというわけではないが、この地ならではの映像として考えたのが、このコハクチョウ。理想としては、『コハクチョウといえば鳥取』といわれるようになり

たい」と語る目次氏は、これまで非常に貴重だとされていたコハクチョウのヒナの撮影に成功、デジタル化された映像は、県外の放送局などにも貸し出しているそうです。

また同社では、2000年よりCATV向けのコンテンツ配信事業「SCN」に取り組んでいますが、その現状として目次氏は、「制作サイドからいえば、ストックした映像が必要とされなければ意味がない。アーカイブビジネスには、誰が喜んでくれるかという視点が重要」と述べました。

同社では今後、子ども用コンテンツや、動物や自然をモチーフとしたハイビジョン映像など、比較的人気の高い映像を中心にアーカイブを続け、最終的には、これらジャンルに特化した「独自のメディア」による展開を予定しているそうです。



「鳥取情報ハイウェイとデジタルアーカイブ」より
秦野 一憲
 (中海テレビ株式会社代表取締役社長)

地元CATV放送局の代表を務める秦野氏はまず、県下一円で整備が進む「鳥取情報ハイウェイ」について触れ、「放送のデジタル化、また地域の産学官連携に対応する基盤として、

その役割は極めて大きい」と語り、今後の展開に期待を寄せました。

地域放送局には、住民の生活情報や季節の話題といったコンテンツが日々、蓄積されていくわけですが、これについて秦野氏は、「これらをアーカイブとして機能させるには、索引機能が重要」と述べました。現在、中海テレビ(株)のホームページでは、コミュニティと題した地域情

報の蓄積と公開が進められていますが、なかでも地域病院との連携により、生まれたばかりの赤ちゃんの顔を紹介するコーナー「赤ちゃん誕生」は、癒しの効果もあってか、非常に評判がいいそうです。

加えて秦野氏は、「いつ、どこで、誰が、何のために使うか」といった視点抜きに、アーカイブの経済性は語れない」としたうえで、「従来アーカイブの概念に加えて、今後はそこに『楽しい』というキーワードを付加する必要があるのではないか」と語りました。

中海テレビ株式会社ホームページ/コミュニティ内にある、「赤ちゃん誕生」のコーナー。病院との連携により、日々、生まれたばかりの赤ちゃんが紹介されている。

<http://gozura101.chukai.ne.jp/>



プログラム

● 挨拶

主催挨拶: **金井 宏一郎**

(中四国デジタルアーカイブ推進協議会会長)

児嶋 祥悟

(鳥取県デジタルアーカイブ研究会会長)

来賓挨拶: **平井 伸治**

(鳥取県副知事)

● 基調講演

「デジタルアーカイブとメディア表現の現状と魅力」

加茂 竜一

(凸版印刷株式会社Eビジネス推進本部コンテンツ開発部部長)

● リレートーク

「地域におけるデジタルアーカイブによる観光振興についての事例他」

笠羽 晴夫 (デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

「アーカイブとコンテンツ流通」

目次 俊夫 (株式会社山陰ビデオシステム常務取締役)

「デジタルアーカイブへの期待」

山本 光範 (鳥取県企画部文化観光局局長)

「鳥取情報ハイウェイとデジタルアーカイブ」

秦野 一憲 (中海テレビ株式会社代表取締役社長)

「デジタルからアナログへ —鳥取をデザインする—」

香月 祥太郎 (鳥取環境大学教授)

デジタルアーカイブ推進協議会(JDAA) 「平成14年度 通常総会」の報告



去る2002年5月29日、東京都千代田区の千代田放送会館2階ホール(スペースエコー)にて、当推進協議会の平成14年度通常総会が開催されました。議事では平成13年度の事業活動が総括されるとともに、平成14年度の事業計画案、および収支予算案が示されました。

議 事

- ・平成13年度の事業報告(案)及び収支決算(案)に関する件
- ・平成14年度の事業計画(案)及び収支予算(案)に関する件
- ・規約/規定の一部変更(案)に関する件
- ・会長等一部役員(任期途中)の件
- ・その他

■平成13年度の活動報告(要約)

平成13年度においては、従来諸地域で続けられている活動の継続と、さらなる活性化を目的として、以下の方針のもとに事業を計画、実施した。

- ・普及啓発、特に地域振興へのさらなる支援とフォローの徹底
- ・情報収集とその提供の強化、相互ネットワークの形成を進め、「情報センター」の構築

■平成14年度の活動計画(要約)

前年度の基本方針を継続して実施しつつ、情報センターとしての役割については、より一層の充実を図りたい。

また、地域振興支援については、諸地域の自発的な活動と、相互の情報交換支援を計画するものとする。

予算計画については、厳しさが続く財政状況を鑑み、以下の基本方針を踏まえた重点指向で臨むものとする。

普及啓発活動

デジタルアーカイブを活用した地域振興の支援を中心に、全国各地への普及開発の徹底を図る。

調査研究活動

サーバ上の「デジタルアーカイブ白書」をベースに、デジタルアーカイブ基礎情報の収集更新に努め、情報センター機能の充実を図る。また、その成果として「デジタルアーカイブ白書2003(仮称)」の作成、発行を検討する。

広報活動

情報センターとしての充実を図りながら、調査研究活動と緊密に連携し、Webによる情報提供を中心に、費用対効果の向上に努める。

組織体制の継続検討

協議会組織のあり方については、昨今のデジタルアーカイブ推進への期待感や各支援団体との連携体制に留意しつつ、引き続き中期的な視点も含めて検討する。

新会長あいさつ



デジタルアーカイブ推進協議会
会長 藤田 弘道

本総会に先立つ理事会において、JDAA新会長 藤田弘道氏(凸版印刷株式会社会長)が互選のうえ就任しました。

就任のあいさつとして藤田氏は、「文明史を溯れば、私たちが今、時代の大きな節目にいらることがわかる」と語り、そうしたなかで「デジタルアーカイブの担うべき役割は極めて大きい」とし、さらなる普及推進の必要性を述べました。

また、多岐に渡るデジタル化技術の可能性のなかでも、特に「破損や消失の危機に瀕した文化遺産の保存や継承には、大いに尽力すべき」とも述べ、次世代に向けた文化継承の重要性を示しました。

来賓あいさつ



熊谷 昌宏

(経済産業省 文化情報関連産業課 課長補佐)

経済産業省の熊谷氏は、「沖縄地区の2002年度予算としてデジタルアーカイブ整備事業費、およびIT産業振興設備整備事業費として計16億円が追加で認められた。沖縄に限らず、IT技術による地域振興はますます活発化している」と語り、引き続きデジタルアーカイブを通じた地域活性化への期待を表明しました。

また、昨年末に衆議院本会議にて可決・成立したプロバイダー責任法についても触れ、「デジタルアーカイブを取り巻く環境は、激変している。変革の大きな時代ではあるが、同事業の普及と発展に期待したい」と抱負を述べました。



大路 正浩

(文化庁文化財部伝統文化課文化財保護企画室長)

文化庁の大路氏(現文部科学省)は、「あらゆる文化財は国民一人一人に公開してこそ意義があるが、無制限の公開は、保存の面などから現実的には難しい。今後はデジタル情報技術を活用することで、公開拡大の実現に向けたバランスを見極めていくべき」と語ると同時に、ありのままの姿を保存する重要性についても触れました。

加えて、文化庁がWeb上で実施している検索システム「文化情報総合システム」国指定文化財等検索システム」を紹介するとともに、引き続きこれらシステムの強化を図っていくとの方針を明らかにしました。

北海道

デジタルアーカイブ地域普及啓発セミナー

デジタルアーカイブ ～ ビジネスチャンスと権利を考える ～



11月27日、札幌市内のセンチュリーロイヤルホテルにて、北海道マルチメディア協会および当推進協議会主催によるセミナー「デジタルアーカイブ ～ ビジネスチャンスと権利を考える～」が開催されました。セミナーでは、ブロードバンド時代ならではの権利問題と、ビジネス展開に関する方向性が示されました。

主 催 ■ 北海道マルチメディア協会、デジタルアーカイブ推進協議会 (JDAA)
後 援 ■ 北海道経済産業局、北海道

ブ・ロ・グ・ラ・ム

【主催者挨拶】中村 真規 北海道マルチメディア協会副会長)

【講 演】「ブロードバンド時代のデジタルコンテンツに関する権利問題について」
菅原 瑞夫 社団法人日本音楽著作権協会送信部長)

「デジタルアーカイブの普及について～デジタルアーカイブ推進協議会の活動紹介～」

笠羽 晴夫 デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

「デジタルアーカイブとビジネスチャンス」

大上 四郎 株式会社札幌テレビハウス代表取締役会長)



「デジタルアーカイブとビジネスチャンス」

大上 四郎

(株式会社札幌テレビハウス代表取締役会長)

(株)札幌テレビハウスの大上会長は、「映像プロダクションは、以前からビデオライブラリーという名のアーカイブを続けてきた」としたうえで、「昨年9.11の事件映像で大儲けをしたフリーカメラマンがいるように、今後は、一個人が価値ある映像を撮る時代」と語り、オリジナル映像市場の拡大の可能性を示唆しました。加えて、映像アーカイブ流通のネット化に関しては、「ローカルという地理的なハンディの克服という意味でのメリットはある。一方で、世界中の同業他社と争うことにもなるので、今後あらゆる努力が必要になるだろう」と語りました。

また、長年の撮影経験から権利問題についても触れ、「グレートバリアリーフ上をヘリで飛行撮影しようとしたら、世界遺産だからということで支払いが生じた。著作権や肖像権のみならず、今後は権利問題に触れずに撮影できることのほうが稀と考えるべき」と述べました。

沖縄

第1回 デジタルアーカイブ講演会

11月28日、那覇市内のおきでん那覇ビル2階・ふれあいホールにて、沖縄デジタルアーカイブ推進協議会主催による「第1回 デジタルアーカイブ講演会」が開催されました。

当日は、デジタルアーカイブ先進地として石川県の事例が紹介されたのと同時に、著作権をめぐる現状と、沖縄における今後の課題について説明がなされました。

主 催 ■ 沖縄デジタルアーカイブ推進協議会

後 援 ■ 沖縄県、デジタルアーカイブ推進協議会 (JDAA)



「石川県におけるデジタルアーカイブの取り組み」

西尾 和秀

(石川県商工労働部産業政策課)

石川県より招かれた西尾氏は、輪島塗や九谷焼、加賀友禅といった同県の文化資産の保存と、データ活用を目的として進められている『石川新情報書庫』について触れ、「パソコンの普及率をはじめ、IT関連分野に対する地域住民の関心が比較的高いというのも、同事業を支える要因のひとつ」と語りました。加えて、「文化資産の継承や、県内IT関連産業の育成、また地域活性といった面でその効用は大きい」と述べました。

ブ・ロ・グ・ラ・ム

【開会挨拶】沖縄デジタルアーカイブ推進協議会

【来賓挨拶】沖縄県商工労働部

【講 演】「石川県におけるデジタルアーカイブの取り組み」

西尾 和秀 (石川県商工労働部産業政策課)

「アーカイブコンテンツに関する著作権問題」

萩原 恒昭 (凸版印刷株式会社法務部長)



「アーカイブコンテンツに関する著作権問題」

萩原 恒昭

(凸版印刷株式会社法務部長)

著作権問題のエキスパートとして招かれた萩原氏は、デジタルアーカイブにおける著作権上の問題やその考え方を、事例を交えて紹介しました。また、デジタルコンテンツの権利問題については、「重要なのは、事前にしっかりと契約を取り交わしておくこと。いま起きている問題の多くは、この契約に関するものだ」と述べ、契約事例を踏まえた慎重な話し合いの重要性を示唆しました。

青森デジタルアーカイブ推進協議会 1周年記念セミナー

～ デジタルアーカイブ普及による、地域振興ならびに地域活性化～

プログラム

デジタルアーカイブ普及による、地域振興ならびに地域活性化

【第一部】「縄文文化とデジタルアーカイブ ～JOMONが世界のキーワードに～」

講師 武邑 光裕 (東京大学大学院助教授)

【第二部】「デジタルアーカイブと地域振興 ～ITを活用した豊かな地域づくり～」

講師 笠羽 晴夫 (デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

11月15日、青森市内のホテル青森・孔雀の間にて、青森デジタルアーカイブ推進協議会による設立1周年を記念したセミナーが開催されました。

当日は、会員をはじめ市民や学生からなる参加者約130人が会場を埋めるなど、デジタルアーカイブと地域振興に向けた同地の関心の高さがうかがわれました。



セミナー第1部の「縄文文化とデジタルアーカイブ」で講師を務めた武邑光裕氏(東京大学大学院助教授)は、ハード重視から、ソフト重視へと移行しつつある産業形態の現状を「ブランド力」の時代としたうえで、「これからの地域経済には、ブランドの確立が必須」と強調しました。

また、第2部で講師を務めた笠羽晴夫氏(当推進協議会事務局長)は、「青森の魅力を、客観的視点から見つめ直すことが重要」と述べ、また今後の指標として、「リアルとバーチャルのバランスを見極めつつ、デジタルアーカイブを地域社会の活性化に繋げる仕組みを考えていく必要がある」と語りました。

主催 ■ 青森デジタルアーカイブ推進協議会

共催 ■ 東北デジタルアーカイブ研究会

協賛 ■ 青森県、青森商工会議所連合会、青森県情報サービス産業協会

愛知

～ あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会(ADAA) 設立1周年～ フォーラム&交流会 デジタルアーカイブの活用と産業観光の振興

名古屋市内の東桜会館で11月19日、ADAA主催によるフォーラム「デジタルアーカイブの活用と産業観光の振興」が開催されました。当日は、愛知県の提唱する「産業観光」とデジタルアーカイブが織りなす次代の観光のあり方について、議論が深められました。

主催 ■ あいちデジタルアーカイブ活用推進協議会(ADAA) 中部経済産業局
後援 ■ 名古屋商工会議所、社団法人中部経済連合会、デジタルアーカイブ推進協議会(JDAA)、中日新聞社、日本観光協会中部支部
協力 ■ 愛知県、名古屋市、社団法人愛知県情報サービス産業協会、中部映像関連事業社協会、中部マルチメディアコンソシアム、東海北陸データベース懇話会



講演1

「あいち発 新しい観光の提案～産業観光の展開」

須田 寛

(JR東海会長)

産業観光という視点の第一人者であり、早期からその提唱を続けてきた須田氏は、まず観光というものに対する認識があまりに低い現状について、「国内観光は非常に深刻な状況にある。従来のように、何もなしから観光に頼るというのではなく、地域の特色、愛知でいえば豊富なものづくりのデータベースを積極的に活用していく必要がある」と述べ、2005年の万博開催時には、「既存の産業博物館や資料館を、万博の『場外展示場』としてPRしたい」と語りました。

また須田氏は、観光誘致とデジタルアーカイブの関係について、「観光の楽しみの一つに、地域のストーリーを追うというものがあるが、そのストーリーを繋ぐのは、情報以外にない。歴史や地域別の比較など、多くの人々があらゆる情報に接する機会を創り出すことが、デジタルアーカイブの役目ではないか」と語りました。

プログラム

テーマ『産業観光とデジタルアーカイブ』

【主催者挨拶】山上 正視 (ADAA代表幹事) / 板谷 憲次 (中部経済産業局産業企画部長)

【講演 1】「あいち発 新しい観光の提案～産業観光の展開」

講師 須田 寛 (JR東海会長)

【講演 2】「デジタルアーカイブの今」

講師 武邑 光裕 (東京大学大学院助教授)

【パネルディスカッション】

「産業観光におけるデジタルアーカイブの活用」

コーディネーター 赤崎 まさ子 (ADAA代表副幹事)

パネリスト 武邑 光裕 (東京大学大学院助教授)

平野 洋 (愛知県企画振興部情報企画課長)

笠羽 晴夫 (デジタルアーカイブ推進協議会事務局長)

治田 嘉明 (京都デジタルアーカイブ研究センターサブマネージャー)

パネルディスカッション

「産業観光におけるデジタルアーカイブの活用」

愛知県の提唱する「産業観光」とデジタルアーカイブとの関わりについて、愛知県企画振興部の平野氏は、「地域文化の裾野を広げていくには、デジタル活用による地域資産の蓄積は意義が大きい。ただ、観光誘致という意味でいえば、もっと感性に訴えかけるような部分も必要」と語りました。

東京大学助教授の武邑氏は、「これだけ明確な方向性を持った地域アーカイブは、そうない。今後は外との相互連携を深めながら、それぞれの取り組みが重複しないよう意見交換していくことが大切」と述べ、また当推進協議会事務局長の笠羽氏は、「産業デジタルアーカイブは過去の蓄積が少ない領域だけに、バックグラウンドとなる事実を、可能な限り蓄積していくことが重要」と語りました。



左から、笠羽氏、平野氏、武邑氏。

「コンテンツフロンティア in 京都2003」開催予告

恒例の京都デジタルアーカイブ研究センター主催によるイベントが、名称を新たに開催されます。今回は、「パソコンの父」として有名なアラン・ケイ氏の講演を皮切りに、産学公連携、人材育成、そして最新のデジタルアーカイブとコンテンツ動向まで、幅広いテーマのもとに議論を深めます。

会 期 ■ 2003年1月29日(水) 10:00～17:00

会 場 ■ 京都市国際交流会館(京都市左京区栗田鳥居町2-1)イベントホール

内 容 ■【第1部】基調講演「IT教育・人材育成に関する講演会」

講演者 / アラン・ケイ

【第2部】パネルディスカッション「産学公連携による産業振興と人材育成」

出演者 / 佐々木 雅幸、坂根 義雄、生田 義久、高橋 時市郎、川邊 祐司、上林 弥彦

【第3部】第4回デジタルフロンティア京都

(1) デジタルアーカイブ・アワード表彰式(受賞者紹介)

(2) 最新のデジタルアーカイブ、デジタルコンテンツ動向について

講演者 / 長屋 龍人、工藤 浩輔

参加申し込み 氏名、企業(学校)名、所属・役職、連絡先住所、電話番号を明記のうえ、FAXかEメールで、京都デジタルアーカイブ研究センターまで
FAX: 075-353-9180 E-mail: cfk@kyoto-archives.gr.jp

問い合わせ TEL: 075-353-9170 / 京都デジタルアーカイブ研究センター
(担当: 菅沼、治田 まで)

第10回シンポジウム 美術館と画像データベース 「デジタル・ミュージアムの新潮流」開催予告 ～次世代ミュージアム事業開発と経営～

デジタル・ミュージアム推進協議会主催によるシンポジウム「美術館と画像データベース」は今年で10回目を迎えます。当日は、次世代のミュージアムの方向性について、さまざまな角度から議論を進めます。

会 期 ■ 2003年2月4日(火) 10:30～17:20

会 場 ■ 千葉市文化センターホール アートホール(TEL: 043-224-8211)

内 容 ■【主催者挨拶】

高島 秀之(デジタル・ミュージアム推進協議会副会長 / 文教大学教授)

【基調講演】「デジタル・ミュージアムの新潮流」

武邑 光裕(東京大学大学院助教授)

【講演】松本 文夫(建築家・プランネットアーキテクチャーズ代表)

平野 芳英(島根県立八雲立つ風土記の丘学芸員)

【シンポジウム】「デジタル・ミュージアムの新潮流」

コーディネーター / 武邑 光裕(東京大学大学院助教授)

パネラー / 平野 芳英、松本 文夫、水沼 啓和、北村 崇史

参加申し込み 氏名、企業(学校)名、連絡先住所、所属・役職、電話番号を明記のうえ、FAXかEメールで、デジタル・ミュージアム推進協議会まで
FAX: 03-5478-8380 E-mail: apdm@orion.ocn.ne.jp

問い合わせ TEL: 03-5478-8370 / デジタル・ミュージアム推進協議会まで

事務局だより

今年度から発行が年2回になりました。そのため、今号は今年度2回目の発行です。この間、いろいろなイベントがありましたので、少しボリューム(16ページ)を多くしています。

各地域のデジタルアーカイブの活動を発表する全国大会の第1回を金沢で開催しました。多くの参加者に出席いただき、大成功であったと思います。次回は、広島予定です。

また、各地でデジタルアーカイブに関するイベントが開催されています。各地域の個性豊かな取組みが報告され、活発な活動が行われていると感じました。今後も、これらの取組みの成果を、この広報誌で紹介していきます。ご期待ください。

『デジタルアーカイブ白書2003』について

現在、鋭意制作中です。出版は、来年の4月頃を予定しております。

●メールマガジンのご案内●

デジタルアーカイブ推進協議会(JDAA)では、普及啓発活動の一環として、メールを使用した情報提供を行っています。

内容としては、JDAAが関係するイベント情報、広報誌等の発行物の案内、JDAAホームページの更新情報、関連団体のイベント案内、等です。発行は、不定期ですが、月1回程度を目標としております。

メール配信をご希望の方は、JDAAホームページからの申し込みが可能です。購読は無料です。

<http://www.jdaa.gr.jp/mail/mail.htm>
デジタルアーカイブにご関心のある方は、是非お申し込みください。

■現会員一覧 平成15年1月現在)

(株)イメージ / (株)NHKエンタープライズ21 / (財)NHKエンジニアリングサービス / (株)NHKテクニカルサービス / (株)NTTデータ / (株)オーエムシークリエイティブ / 岡村印刷工業(株) / (学)河合塾 / (株)紺文 / 三洋電機(株) / シャープ(株) / 大日本印刷(株) / (株)ティ・エス・エス・プロダクション / (株)電通 / (株)電通テック / (株)東北新社 / 鳥取ガス(株) / 凸版印刷(株) / ナカシャクリエイティブ(株) / (株)ナック映像センター / 日本電気(株) / 日本政策投資銀行 / 日本ビクター(株) / (株)日立製作所 / (株)PFU / 富士写真フイルム(株) / 富士通(株) / 松下電器産業(株) / 三菱電機(株) / 早稲田システム開発(株)

30社

石川県 / 香川県 / 岐阜県 / 埼玉県 / 島根県 / 奈良県 / 上田市 / 大垣市 / 京都市 / 鳥取市 / 高遠町

11自治体

デジタル・ミュージアム推進協議会 / (財)芸術研究振興財団 / (財)デジタルコンテンツ協会 / 青森デジタルアーカイブ推進協議会

4団体

合計: 45会員

表紙作品について

「色絵鳳凰図平鉢 古九谷」17世紀

石川県指定文化財 石川県立美術館蔵

古九谷色絵の傑作として語られる口径34.3cmの平鉢。赤、黄、緑、紺青、紫の五彩に彩られた鳳凰が、素地を活かした絶妙の意匠構成のなかで、一段と際立つ。

デジタルアーカイブ推進協議会のWebサイト <http://www.jdaa.gr.jp/> 最新情報や本誌のバックナンバーがご覧いただけます。

発行所: デジタルアーカイブ推進協議会(略称: JDAA) Japan Digital Archives Association

〒102-0094 千代田区紀尾井町3-6 秀和紀尾井町パークビル8F (財) デジタルコンテンツ協会内

TEL: 03-3512-3906 FAX: 03-3512-3908

発行人: 事務局長 笠羽晴夫 編集: 広報部会 表紙題字: 平山郁夫 表紙写真提供: 石川県立美術館

デザイン・印刷: (株)オーエムシークリエイティブ

(本誌記事の無断転載・訳載を禁じます)